

伊勢崎署占領事件の 真相を語る座談会

私は、伊勢崎署占領事件を書くに就て当時私自身は、小林多喜二以下講師と共に、まさきに検束され、留置場の中にいたので、この騒動のフン困気はよく判っていたにしても、その経過については少しも判らず後日関係者から聞いただけであるのもっとその真相を掴み、できるだけ正鵠を期したいと思い、従弟の菊池盛男君（事件の関係者で前日共伊勢崎市会議員）に依頼し、『伊勢崎署占領事件の真相を語る座談会』を、昭和四十二年八月五日夜、伊勢崎市北千木町の同氏宅（筆者が生れ育った家）で開催してもらった。集った者は、同事件の直接関係者で私より二つ年上満七十才の渋沢広吉氏（当時社会大衆党員）を筆頭に、

最年少者で当時十六才の少年であった光山武嘉氏（五十二才）まで、皆六十才以上になった往年の斗士十三人と傍聴者五名の左記十八人であった。会は菊池盛男氏が司会者となり、何故小林多喜二、中野重治、村山知義のような大物が地方の小さな都市にすぎない伊勢崎まで講演にやってきたかの理由を、当時ナツプの会員であった菊池敏清氏が説明、そのあと出席した関係者から、事件の真相が語られ、途中私から、何故こんどの会をもつに至ったかの挨拶と説明があり、引きつづき事件の思い出と質疑がかわされ、午後十時半会を閉じた。

出席者（括弧内は現在の年令）

◎関係者 菊池盛男（57）、菊池敏清（57）、渋沢広吉（70）、渋沢要（61）、竹内幸作（65）、弥勒寺清（65）、弥勒寺撰三（60）、小沢力爾（61）、下田王二（61）、岡田宝司（63）、正金寺忠作（61）、光山武嘉（52）、菊池邦作（68）、

◎傍聴者 星野勘一、早瀬演、相沢千太郎、小林進、小林悟

私の挨拶―私は、今年の十一月で満六十八才の日本

人の男の平均寿命に達します。そのあとの私の寿命は全くの儲けものでありますが、もう何時死ぬか判りません。それでいま丈夫のうちに、いままで私が皆さんと一緒にやってきたことやその後私が書いたもののうち、是非、私の気持ちとして後世に遺したいものを、一冊の本にまとめておきたいと思うのです。その中の一つとして、いままで世間に知られていない『伊勢崎署占領事件』をえらんだわけでありませう。あの日私はまさきぎに検束されてしまったので、留置所の中で、外の様子や乱斗騒ぎは感じとれたのでありますがその経過については全く判りません。私が活字に遺したものに大きな誤りでもあったら後世の人に申訳がありませんので、出来るだけ誤りを少くし、公正を期したいと思ひまして、今晚直接事件に関係された皆さんにお集りをいただき当時の想い出を語っていただいて事件の真相を探りたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひ申上げます。

◎司会者のことば(菊池盛男氏)、僕が昭和五年の事件で一年喰らい込み同六年七月に出てきて、二ヶ月ばかりすぎた多分九月の六日か七日僕はどうも七日の呑

竜様の晩と思うのだが、伊勢崎の共栄館で文芸講演を開いたんです。講師は小林多喜二、中野重治、村山知義の外に築地の男女優四人位を加えた六十七人であったと思う。この文芸講演会が伊勢崎署の計画的な大弾圧によって、講師や主催者側の主なる者が総検束されてしまった。そのため集った聴衆や県下の斗士がおこって、伊勢崎署に押しかけ、署長以下を追い出し、一時警察署を占領してしまつたという事件です。この事件について、まず最初に、敏清さんから、何故伊勢崎に小林多喜二一行が来るようになったか、またどういう順序で一行を迎え入れたかということについて一応お話し願ひたい。

群馬ナツプの拠点 (当時ナツプ会員菊池敏清氏)

当時日本共産党は非合法であつたので日本の左翼文壇は『プロレタリア作家同盟』(一名ナツプ)の下に統一されていきました。がその支部組織がこの伊勢崎地方にあり機関紙の戦旗が毎号五十部(最高時一五〇部)もきていたのであります。いわば全国の模範地区今日というモデル地区だつたんですから、はがき一本の

要請で講師の派遣もカンタンにOKということになつたのです。それでさっそく、会場、日時、講師、入場料20銭を刷込んだ前売り券を印刷して準備を進めました。いよいよ当日になつたので私と盛男さんと二人で本庄まで出迎えにゆきました。当時はバスがないので

武州ハイヤー二台を雇つて、本庄駅まで行つたのですが、到着の時間を待たずハイヤーを駅前に待機させ上り列車に乗り込み、深谷までゆき、そこで約束の時間の下り列車に乗りかえて、各箱を歩いて講師を見つけようということになつた。何にしる小林にしても中野にしても写真では見て知っているが本物は見たことがないので、とにかく乗客の顔をしらみ潰しに見てあるいは、幸いいくつも箱を歩かないうちに、ゆかた姿で将棋をさしている一行を見つけることができたのです。

さて一行を案内して本庄駅に下車すると、埼玉県警から派遣され二人のスパイが駅頭に待ちうけて、一寸したトラブルがありました。奴等を尻目に待たしておいたハイヤーで伊勢崎に向つたわけです。しかしまだ時間が早かつたので、ひとまず私の家に小憩してもらい、夕飯を盛男さんの家で用意するまでの間、小林

多喜二から、『文学と台所』という話を聞いたことを覚えております。それで、話が終り夕食をすませて、再び私宅まで戻つた時トラック二台で乗りつけた伊勢崎署員に総検束されてしまつたのです。

茗荷汁に舌鼓 菊池盛男氏 いまの話の夕飯だが、その時妹がつくつた茗荷の味噌汁がうまいというので、小林多喜二など何杯も重ね、大鍋一ぱいの茗荷汁を全部平げてしまつた話が、今でも語り草になつていゝ。それで僕は少し片づけことをして、敏清さんの家に引返して見ると、講師以下全員が総検束だということで、これは大変と、自転車に飛び乗って、共栄館に駆けつけ、壇上に登り、事件を報告しようとしたら、五人の警察官が報告させまいとして、僕を引きずりおろし検束するというさわざです。しかしその中で私は総検束の経過を報告したので、聴衆はいかり総起ちになつて、官憲の横暴を叫び検束される僕のとをゾロゾロ警察までついて来ました。一五〇人位いたでしよう。騒ぎはそのあと起つたのです。

詩を朗読して中止 弥勒寺撰三氏(当時社会大衆党員) 盛ちゃんが検束されたあと、皆が前後策につい

て齋藤力さんの二階に引揚げ、とにかく講演会は、つづけること、全県下から同志を緊急動員することを決め、すぐ手分けして行動に移ったのです。

私は共栄館に帰って、講演の方を担当することにになりました。しかし開会しても、出る者は片ばしから中止で、仕方なしに私も壇上に起って三好十郎の『棺の後から』という詩の朗読を始めたところ、これも中止というわけです。そこで私は、そんなバカなことがあるか、この本は、本屋で売っているものだと抵抗したが結局引づりおろされてしまった。それからいま参議院議員の選挙に自民党公認として立候補している佐田一郎さんなども馳けつけ、演舌口調で始めたのですがこれも中止になってしまったのです。そのあと私は、浜沢広吉さんと二人でハイヤーで強戸へ同志の動員に行きましたが、強戸では遂に一人も来てくれなかった。大乱斗はそのあとで起ったのです。警察の前に警察官の自転車がづらつと並んでいました。当時のライトは、皆蓄電池でしたから、これを皆で全部つけっぱなしにしてしまったのです。一度にバツと電燈がつかまりました。しかしそれがだんだん光りが細くなって行

ったのを覚えています。大乱斗が一応おさまった後同志は再び齋藤力さん(故人)の二階に集って今後のことを話し合いソバを食べて別れました。二時頃だったでしょう。

警官の横ピンを擲った三好久子、岡田宝司(63)氏

さつき戦旗の話が出たが僕は当時戦旗の配付を手伝っていたが、伊勢崎支部の勢力範囲は東は太田から西は駒形までであった。それからあの乱斗の際、僕は築地の女優三好久子—いまNHKの旅路に出てくる—と一緒にいたのですが、彼女の勇敢にはおどろいたね。警察官の横つらをつらをピンと擲りつけたんだよ。とにかく勇敢だった。十九才位で綺麗な女優さんだった。署長の椅子を占領 浜沢広吉(70)氏 はじめこっちの勢力が圧倒的に強かったので、署員全部姿を消してしまい、警察はカラッぽになってしまった。署長もモチロソない。そこで僕か一時署長になると云って、署長の椅子に腰をかけ、大いに気をよくしたものである。その時外の者は、警察の事務室にむしろを引いてすりこんでいた。ところが、それからしばらくすると泉特高課長が警察官の一隊を引きつけて、われわれに襲

いかかった。それで大乱斗になった。その時はこっちが七、八十人位いたと思う。十一時頃から二時頃までやり合った。さいごに僕と石井弁護士(いまの前橋市長)と吉田さん(後の潮流社長)の三人が代表にえられ、泉特高課長と会見全員釈放を要求した。しかし警察側は、逆に全員の撤去を求めてきた。しかし警察としては、一時的にせよ。署員全員が職場を放棄したという弱身があるので、さいごに妥協が成立した。①全員翌朝までに釈放する。②この事件で犠牲者を出さない。③新聞に出さないの三項が条件であった。とにかく、奴等職場を放棄したことでも強く出られなかったようだ。

尚弥勒寺清、下田壬二、小沢力爾、正金寺忠作の諸氏からもそれぞれ発表があり、ついで質疑にはいった。

質疑応答

菊池—あの乱斗の最中半鐘をたたいた者がいると伝えられているが、この点の真相は、どうなんですか？

弥勒寺(撰)—それは齋藤力君の家に集った際、実際に話で、半鐘を打って事件を世間に知らせ大事件

に発展させるというので、その役割まで決ったんです。遂に半鐘をたたいたところまではゆかなかったのです。

菊池—あの事件に香具師(やし)が参加したという説がありますが、この事実がありますか？

菊池(盛)—同志のうちにかつて、やくざであったもの(特に名を秘す—盛男)もいたので、そういう連中が知り合いの香具師を動員したということもあり得ると思う。

菊池(邦)—警察官の中に帽子や肩章をもぎとられた者がいたという説はどうですか、それからケガ人が相当出たともいわれるが？

菊池(盛)—帽子と肩章については確認できないが、乱斗は僕がまだ留置場へ入れられない時なので、特高課長のキンタマを傘で僕が突きとばした事実はある。また重傷者は出なかったが両方に、バンソウ膏位いの軽傷者が出たことはたしかだ。

菊池(邦)—光山さんの家に保管してあったという前売り券さえあれば事実を判明するのですが、あの事件の日付けですね。上毛新聞によると昭和六年の九月

六日になっております。しかし同新聞はその日連取（宮郷村）の尾内航空兵の葬式を写真入りで伝えていきます。しかし、あの日は僕が、白紙の弔辞を読んで問題を起した日で、果して講演会と同じ日であったでしょうか？

竹内―イヤそれはちがう、僕もあの葬式には行っていないので同じ日とは思わない。（外に同じ意見多数）

菊池（盛）―僕は吞竜様の晩と記憶している。

菊池（邦）―前売り券は何枚位発行しました。横書きですか、縦書きですかまたその大きさは？

菊池（敏）―三百五十枚刷り、全部出ました。形はたん冊方で、縦書です。縦が六寸、横が二寸五分位、入場料は二十銭でした。

光山―約束しておいた当日の前売り入場券が遂に発見できないで申しわけありません。たしかに二―三年前まで、日本資本主義発達史講座の中に挟んであったのを確認しているんですが、その本がどこへ行ったか見つからないのです。

竹内―僕は当日木戸番の責任者だったので、二百五十枚位はあつまりました。

り、私の希望で九、二二事件（本書実録摺問にてくる事件）につき、思い出を聞いたところ菊池盛男氏から検査の朝、逃走し、約一ヶ月の間、東のあみだ（地名）の桑原の中にひそみ、家人から食物を運んでもらって生きぬいた劇的な話などあり、非常におもしろかったが、それは後日のたのしみに残しておくことしよう。

なお座談会には出席しなかったが、事件に重要な役割を演じた左記各氏の談話をつけ加えます。

力関係を見る 吉田庄蔵氏（63）（元潮流社長）談
座談会がおわったので、参会者が三々五々会場（菊池敏清氏宅）から、帰りかけていた時、二―三台のトラックが、会場めがけて、やってきました。その時菊池（邦）さんは立小便をしていたのを覚えてます。僕は、これはただごとでないと感じ、座談会に出席した女の人二―三人をつれて、菊池（敏）さんの西南にある桑畑に導き、コッソリ逃がしてから、オートバイを押して、一旦自宅に帰り、重大性を感じして、前橋の社大党の選挙事務所へ、事件を急報し、県下から同志を動員するよう要請しました。それから共栄館に行

菊池（邦）―あの時動員された大衆は、二―三百人位という人もいますが、その点はどうですか？また留置所の中と外と相呼応して革命歌を合唱した氣勢が最高潮に達した時の一番多かった時の人数は？

波沢（広）―そうは動員できなかった。頼みにした強戸が一人も来なかった。大乱斗の時で七、八十人位と思う。しかし出たりはいったりしたし、あとからもきたので延の動員数は相当多かった。

菊池（邦）―それから講師側であるが上毛新聞には小林多喜二、中野重治、村山知義の三人の名前と築地の女優一人（これは三好久子さんのことですが）となつております。

下田―鹿地巨もいたのではないか。

菊池（敏）―鹿地が来たのは、そのあとだ。江口渙もきたが、これも別で時がちがう。

弥勒寺（清）―鹿地が来た時、剛志駅まで向いにゆき、二人で自転車に乗ってきたが、砂利に自転車の輪をとられ、二人が県道に投げ出されたのを覚えていゝる。だから鹿地はあの占領事件の時ではない。

以上でだいたい伊勢崎署の占領事件の座談会をおわ

つて残った同志と相談の結果、講師は総検されてしまつて若干おくれたが、講演会だけはやることに決め、事件の全貌を報告して諒解を求めた上、開会したのであります。しかし、臨検の警察官は演壇に登る者は片ぱりから、中止を命じ、十三人位の弁士全部が、中止されたので、聴衆が怒ってしまい総起ちになり、講師を返せと迫り警察官と対峙する始末です。そこで私共は楽屋に引きあげ、相談の結果今夜十二時を期して、伊勢崎署を襲撃することとし、大衆の動員、その他の手筈も決め、必要の場合は、警察の電話線を切断したり、半鐘を乱打することなどそれぞれ役割を決めて、待機の姿勢にはいつたのです。そこへ新聞記者が四―五人やってきて、『今夜の結末をどうつけるのか』と質問を乱発するので、僕は、『今夜はこれ以上抵抗してもしようがないから、皆それぞれ家に帰って寝る。対策は明日だ』と偽って新聞記者を帰したのです。

さて警察での乱斗はそれから二時間後経て十一時半頃からでしょうか？それまでにこっちの力に押されて警官は全部署内から姿を消したので、仮庁舎の事務室

を片づけ机や椅子は庭へ担ぎ出し物置から筵を引っぱり出して広くなった事務室に一同が座りこんだわけです。また庭にあった警察の自転車は片ばしから、前の川に投げこむなど氣勢を挙げる連中もあり、かれこれ、二三百人の大衆が、警察の内外に押しよせていました。そのうちに警察側も緊急手配によって一五〇人位の警官を動員し逆襲してきたのです。勢いの趣くところ、大乱斗となったのですが、力関係で警察側は大衆に押され勝ちでした。そのような対立状態が午前一時半まで位つづき、結局警察側も、このままで押し切れないと見てとったか、一応手を引いて、警察の裏側に退いたのです。そこでこっちは目的は乱斗でなく講師や検束者を釈放させることであるからというので石井弁護士と僕が代表にえらばれ、泉特高課長、伊勢崎署長と会見し、事態の収拾について相談しました。しかしさいしょは先方も、いろいろおどかしをかけたらし仲々こっちの全員釈放の要求を聞き入れないので、その都度大衆側に報告すると『代表は弱腰でダメだ。もっと確り交渉しろ』などとハツパをかけられ、さいごに先方から今夜の事件を公にしない(新聞記者に話

さない)という条件を容れれば夜が明けるまでに全員を釈放する。従って一人も犠牲者を出さないということを出して来たので、こっちもおとなしく引き揚げることを承認し、妥協が成立したのです。恰度午前二時頃でした。とにかく僕は力関係というものを、その時始めて知りました。仮りに非合法であっても、こっちの力が大きく、先方に落度(責任と体面)があれば、その非合法も合法的になるということですね。まあ以上がだいたい経過です。

俺だけで三十人動員 遠藤可満氏(66)(戦後社会党 県議)談

あれは恰度俺が三十才の血気盛りの時で、たしか昭和六年九月の県会議員選挙のまっさい中のことであった。尾池君が勢多郡から立候補していたので夜十時頃であったと思うが、大胡の演説会をおえて、事務所深夜食を喰っている伊勢崎から大事件だという電話がはいったので、僕が総指揮をとり居合せた者、市内の者を至急動員し三十人ばかりをトラックに乗せ沢山の筵も用意して現状に駆けつけた。その時は十一時半頃だったと思う。その時は警察の前は大乱斗のさい中で、僕

はすぐその乱斗の中にとび込んだが、そのとき、二人の巡查が帽子をとられ、誰がとったのかその帽子を、警察前を流れている小川に投げ込むのを見た。乱斗は可なり、長く続いた。午前一時頃、泉特高課長が、警察の奥の小使部屋に僕を呼んで『遠藤君見たところ君が最年長者のようだから、当局は君を首謀者と見なす。君が責任をもって、この事件の拾取をつけないければ、君を責任者として検束するぞ』とおどかしやがった。そこで僕は、『よろしい。それでは即時全員を釈放しろ。そうすれば責任をもつ』と押し問答をしたが、その段階では、まだ釈放するとは泉の野郎、どうしても言わなかった。その夜の動員数であるが、後から駆けつた者は別として大乱斗の時は七、八十人は下らなかつた。前橋だけでも三十人行った。尤もこの中に大胡の連中もいた。

普通なら騒擾罪 坂内一登司(67)氏(元日共群馬県 委員長)談

とにかくあれだけの大事件であるから、当時の普通の考え方からすれば、騒擾罪が成立して五人や十人はひっそくられたのに相違ない。民衆側では半鐘を鳴ら

した者もあるという程で両者それぞれ二百人位を動員し相對峙しての大乱斗で、とにかく一時民衆が警察を占領し警察官が署内に一人もいなくなったのだからなあ。尤もこっちにはこのことが幸いして犠牲者一人も出さずに済んだわけだ。当夜活躍したのは石井弁護士(現前橋市長―記者)、佐田一郎(佐田建設社長―記者)、吉田君(潮流社長)、遠藤君、堤、盛などだ。朝の二時頃になって泉とこっちの代表との妥協が成立して、事件は収まった。その時の民衆側の代表は、石井君、吉田君、それに遠藤君であったか、誰であったかよく覚えていないが三―四人位であったと思う。

なお、吉田氏(元潮流社長)に私が『坂内君などは普通なら騒擾罪の成立も必至で、十人位の犠牲者がでるところであった』と云っていますがと聞くと吉田氏は次のように答えた。

『私は翌日、全員釈放をたしかめるために、伊勢崎署に行ったところ、十二―三人の警官が、包帯をしたり、バンソウ膏を張ったりして、前夜の乱斗の激しさを話していた関係から、公務執行妨害、傷害、器物破

襲、家宅侵入はモチロン、騒擾罪など五つか六つの罪名が一緒に着せられたのではないかと考えてます。』

と騒擾罪の可能性を示唆した。

晩秋三眠のとき 木暮はる子氏（菊池盛男氏の妹）

恰度晩秋蚕が二眠にはいったときだったからよく覚えていいます。小林多喜二二行がくるというので、朝から家中で待っていました。しかし何をご馳走したらいいかということ、うち中で相談した結果、田舎のことだから、茗荷汁の卵とじがよかろうということに決り、わたしが東の畑から、茗荷を二つかみばかし、とってきて、大鍋を洗い用意して待っていました。その内に一時頃になって本家の敏清さんのうちへ一行が到着したという知らせがあったので、夕飯の用意にとりかかったのです。小林多喜二の話が終って、三時頃女優さん二人をふくめ七、八人の一行が、家の奥の座敷へドヤドヤと上り、しばらく待って貰って早夕飯をたべたのです。その時小林多喜二は白い緋の着物を着ておりましたが背の高いヤセ型の人でした。茗荷汁がうまいと喜び二杯たべ、わたしに、向って『この辺では茗荷が沢山獲れるのですか？』と聞くから、わたしは

『たべ切れない程とれます』と云いましたら多喜二は『田舎はいいですね』と云って笑ったのが忘れられません。検挙は一行が敏清さんの家に引揚げたすぐ後だったのです。

参考新聞記事

ナツプ作家数名

伊勢崎署に検束さる

無産党有志主催の講演会を前に

署では理由を厳秘

伊勢崎町無産党青年有志主催プロ作家文芸講演会は、六日午後七時頃伊勢崎町共栄館において開会されたが、此より先弁士として東京より村山知義、小林多喜二、中野重治三氏外ナツプ作家男女三名は、自動車で来崎し、労農大衆党伊勢崎支部員小林邦作、斎藤力、菊池利義（敏清の誤り―筆者）の諸氏と共に佐波郡茂呂村大字下茂呂支部員菊池盛男方で晚餐を取り、午後六時会場に赴かんとした際、自動車二台で乗込ん

丸氏外代表者数名は三度び伊勢崎署に出頭釈放方を陳情した。

（同上）

検束者は

既に東京に送還

黨員も夕刻までに釈放

ナツプ作家検束騒ぎ

（夕刊所報）東京から来たナツプ作家小林多喜二外数名及び佐波郡内無産黨員小林邦作氏外数名の検束騒ぎについて、その理由は伊勢崎署で絶対秘密に附しているのが判然しない。尚七日朝八時頃石井繁丸外代表が釈放願いに出頭する前自動車で本庄町に送り、東京に帰還釈放したものと解される。尚郡内黨員はおそくとも正午までに釈放される模様である。

（昭和六年九月九日上毛新聞朝刊）

伊勢崎署検挙者八日釈放

既報伊勢崎署に検挙された佐波郡無産黨員小林邦作

だ伊勢崎署員に前記十名全部検束されたので菊池盛男氏外支部員代表は、同署に検束理由を質しに赴いた所同氏も検束される騒ぎあり、県特高課員数名総動員の活動で同署は、ものものしい緊張を呈した。之れが為講演会には弁士が骨抜きとなり、支部員一同は狼狽し、二百余名の聴衆の為、間に合せ弁士を充て講演会をつづけ、同十時半頃閉会した。尚検束理由は伊勢崎署では絶対秘密にしている。

（昭和六年九月八日上毛新聞夕刊トップ記事）

代表者が伊勢崎署に出頭

—— 釈放方を陳情す ——

別項ナツプ作家六名と労農大衆党伊勢崎支部員五名検束に依り、支部員は急遽前橋本部に報告と同時に応援を求め同夜石井繁丸、遠藤可満両氏を始め十数名自動車で駆けつけ、これに合体した支部員五十余名は、再び伊勢崎署に出頭し検束理由を質し、これが釈放方を嘆願したがはねつけられ、七日午前二時頃まで頑張りつづけたが、同署では又も検束の態度に出た為、己むなく引上げ、善後策を協議し、同日午前八時石井繁

氏外五名は取調中であつたが、八日夜いづれも釈放された。(同年九月十日上毛新聞夕刊)